

市立大町山岳博物館 企画展

よみがえる ^{たか} ^ね 高嶺の草花

しむらう れい きゅうぞう しょくぶつ ひょうほん
- 志村烏嶺 旧蔵植物標本 -

近代日本登山の先駆者が遺した山の宝物

白馬岳登溪

千九百零七年英國山

岳会雜誌に於て

五月号に於て

歐洲に紹介せられた

明治三十七年六月廿日

志村烏嶺



大町山岳博物館



市立大町山岳博物館 企画展

よみがえる 高嶺の草花

－志村烏嶺 旧蔵植物標本－

近代日本登山の先駆者が遺した山の宝物



大町山岳博物館



市立大町山岳博物館 企画展

よみがえる 高嶺の草花

－志村烏嶺 旧蔵植物標本－

近代日本登山の先駆者が遺した山の宝物

- 主催 市立大町山岳博物館
- 会期 平成19年7月7日（日）～9月24日（月、祝）
（7月9日・8月27日・9月3・10・18日は休館）
- 開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）
- 会場 市立大町山岳博物館 特別展示室・ホール
- 観覧料 大人 400円 高校生 300円 小・中学生 200円
※ 常設展示と共通割引、30名様以上の団体は各50円引
そのほかの各種割引についてはお問い合わせください

- ・表紙 白馬大雪渓（志村烏嶺：撮影、市立大町山岳博物館 蔵）
- ・裏表紙 シロウマオウギ（市立大町山岳博物館：撮影）
- ・扉表紙 白馬山御花畑（独立行政法人 国立科学博物館 蔵）

もくじ

ごあいさつ

山岳文化都市宣言

展示構成

第一章 白馬岳との出会い	8
第二章 植物と烏嶺	10
第三章 写真と烏嶺	12
第四章 登山と烏嶺	14
烏嶺略年譜	17
展示図版説明	19
展示資料目録・資料解説	24
展示さく葉標本	26
引用文献	46

凡 例

1. 本書は市立大町山岳博物館において、平成19年7月7日（土）から9月24日（月、祝）まで開催の企画展「よみがえる 高嶺の草花―志村烏嶺 旧蔵植物標本―近代日本登山の先駆者が遺した山の宝物」の展示解説書である。
2. 写真や図表などの図版に付した番号は展示写真・図表パネルや展示資料の解説プレートの番号と対応するものではない。
3. 資料名称は原則として所蔵先の呼称によるが、一部統一を図るために変更した。
4. 会期中、一部展示替えを行う。
5. 企画展のさく葉標本の同定は、高橋秀男氏（生命の星・地球博物館名誉館員・横浜植物の会会長）に依頼した。
6. 展示さく葉標本の解説文は、『山溪ハンディ図鑑 8 高山に咲く花（山と溪谷社）』を引用し、注の人物紹介については、主に『世界山岳百科事典（山と溪谷社）』、『長野県植物誌（長野県植物誌編纂委員会）』を引用した。
7. 展示に用いた植物写真は当館が撮影・所蔵しているものである。
8. 企画展の企画は当館学芸員・関悟志（現 教育委員会生涯学習課生涯学習・青少年係）を中心に館長・柳澤昭夫、副館長・宮野典夫、庶務・平林恵理子、合津明、学芸員・清水博文、千葉悟志による。
企画展および本書の執筆は学芸員・岑村隆、千葉が、編集は千葉が担当した。機関紙『山と博物館（企画展特集号 6・7月号）』の編集は清水が、企画展リーフレットの作成ならびにさく葉標本の作製は千葉が担当した。

ごあいさつ



(1874~1961)

志村烏嶺、本名・寛は、明治7（1874）年、栃木県那須郡烏山町（現 那須烏山市）に生まれました。

「烏嶺」はこの地にちなむ号です。

栃木県尋常師範学校卒業後、栃木県の小中学校、師範学校で教員を勤め、明治36（1903）年に長野中学校へ博物科教師として赴任。翌37年8月、白馬岳と出合います。長野市を徒歩で出発。柳澤峠に立って初めて白馬連峰を目の当たりにし、「代赭色の断崖、谷を埋めた残雪、夕陽に輝く峰頭、実に荘厳を極めた勇姿に、突如頬をガーンと殴られたような気がした。那須、日光、浅間、八ヶ岳等かつて登山した山々とは全く桁

違いの代物であった」^{※1}、と述べています。いよいよ白馬の核心部、葱平に至っては、「絢爛艶麗なるいわゆる御花畑の光景、その美その麗、何物かよく比すべきものぞ。この天の楽園に逍遥する吾は、心すでに神、身はこれ仙」^{※2}と心打たれ、高山植物研究の道を踏み出します。写真術の心得があった烏嶺は、この山行でもシャッターを切り、わが国最初期の山岳写真家の道も歩み始めます。明治後期から大正初期、近代日本登山の黎明期にあつて、高山植物研究と写真撮影を二大目的とする山行を重ね、日本山岳会創設にも関わりました。

山岳博物館には、烏嶺が採集した数多くの高山植物標本や、文書資料が残されています。

本展では高山植物標本を主役に、植物に親しみ、写真を撮り、登山をした烏嶺を紹介します。

ご高覧のほど、お願いいたします。

平成19年7月7日

大野山岳博物館

山岳文化都市宣言

私たちの大町市は、雄大な北アルプスのパノラマを代表とする、四季折々の変化に富んだ豊かで美しい大自然に恵まれています。

北アルプスの山麓で生まれ、育ってきた市民は、その長い歴史を通じて、山岳がもたらす豊かな自然環境の恵みを受けながら、自然と人との共生する独自の山岳文化を形成してきました。

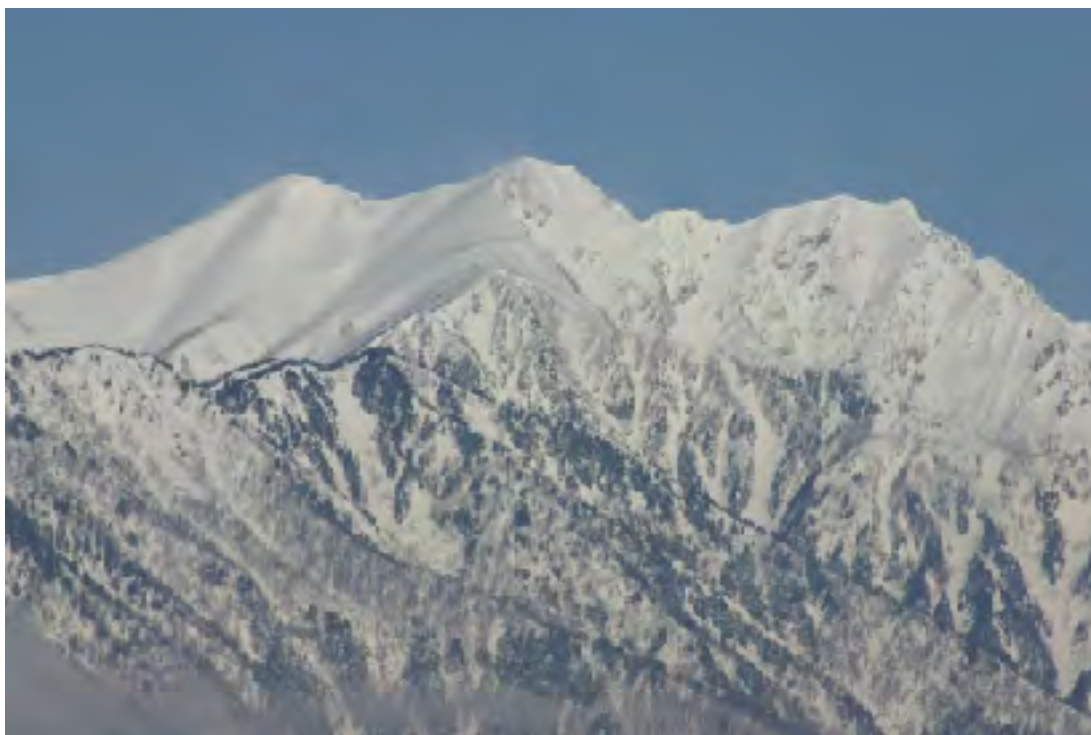
私たちは、先人たちが守り育ててきた山岳文化を受け継ぎ、かけがえのない豊かで美しい自然を次の世代に伝えていかなければなりません。

21世紀を迎えた今日、身近な生活環境の改善から地球環境の保全まで、様々な環境問題への取り組みが重視される中で、本市においても、市民、事業者、行政等が協働と連携を図りながら、新しい時代の課題や要求に応える山岳文化の振興が求められています。

本市における山岳文化の拠点である山岳博物館50周年の節目にあたり、山岳博物館創設時の理念に学びながら、「環境の世紀」と言われる21世紀にふさわしい山岳文化の発展と創造をめざして、大町市を自然と人との共生する「山岳文化都市」とすることを宣言します。

平成14年3月15日

大町市



私の歩んできた道をふりかえってみて、
山の靈氣と花の香気に包まれた人生を
ありがたいことだと思います。（中略）

今はただ、
「山を愛し、高山植物を愛してくれ」と
人々にうったえる気持ちでいっぱいです。

志村 烏嶺

白馬岳との出会い

明治37(1904)年8月19日、鳥嶺は勤務先である県立長野中学の職員清水市太郎しみずいち たろうを伴い長野市を徒歩で出発する^{※1}。

そして柳澤峠(現 長野市鬼無里と白馬村の境、当時の主要道)に立ち、白馬連峰の雄大なスケールに驚嘆した。理科大学矢部吉禎が著した「白馬植物目録」(日本植物学会の植物学雑誌に掲載?)で、植物が豊富なことは知っていたので、つい3日ほど前に八ヶ岳に登り、赤岳から白馬連峰を遠望し、「矢も盾もたまらず」実行してしまったこの白馬行の最初の衝撃だった^{※1,3}。

正確な地図もガイドも存在しない当時のこと、官有林見廻りをしてきた北城村細野(現 白馬村八方)の丸山常吉に案内を頼んだ。常吉は「老体の故を以て」、息子広太郎と丸山吉十が同行することとなった^{※1}。

20日午後4時、葱平に至った鳥嶺は、お花畑と雪渓と山々が織りなす山岳風景に魅了され、夢中で植物を採集し、写真を撮った^{※1}。

この八ヶ岳に続く白馬との出会いが、鳥嶺のその後の人生を決定づける。

晩年、鳥嶺は「小島(鳥水)^{注1}氏が近代登山の黎明は槍ヶ岳というなら、私は近代登山の黎明は白馬からといたい^{※4}」と述べている。

これは、第一回白馬登山の成果をもって、著書、雑誌、新聞等でその魅力を自ら普及啓発し、撮影した写真が日本登山界のみならず、ウォルター・ウェストン^{注2}を介して白馬山系としては初めて国外に紹介されたという自負からの言であるが、「日本近代登山」の定義はともかくとしても、この言にはある種の的を獲たところがある。

明治16(1883)年には窪田畔夫(北安曇郡長)や渡辺敏(仁科学校訓導)らが、早くも科学的な観点をもって大雪渓から登山し、22年には地質学者の大塚専一らが縦走、28年には小杉復堂らが小川温泉からこの山群へ探検的な登山を行なっている。^{※5}

また、長野時代の鳥嶺の先輩格、植物学者にして、後々矢沢米三郎^{注3}とともに長野県理科教育の中核となる河野齡蔵^{注4}は31年に初めて白馬に登り、以降鳥嶺同様に高山植物研究、野外教育や登山行為普及の格好のフィールドとしている^{※6}からである。

そして信仰の山を除き、北アルプスの山々の中で最も早く多くの趣味的登山者が目指し、山小屋も整備されてゆく山の代表が白馬岳であった。山そのものの魅力やアプローチの利便性ととともに、鳥嶺らパイオニアの普及啓発活動の力が大きかったと考えられる。

注1 小島 鳥水 (1873~1948)

明治6(1873)年に愛媛県高松市に生まれる。本名 久太(きゅうた)。横浜商業高校卒業後、横浜正金銀行に勤務。明治29(1896)年、評論『一葉女史』の注目により文筆活動を始め、後に日本に近代登山をもたらした書籍のひとつとも評される志賀重昂(しが・しげたか)が著書『日本風景論』を手にし、山の魅力の虜となり、丹沢や箱根へ足を運ぶ。明治32(1899)年に浅間山へ登り、登山への情熱がより一層高まる。その後、日本アルプスへ登山する。

明治35(1902)年に槍ヶ岳頂上を極め、下山後、横浜で知り合ったウォルター・ウェストンに岡野金次郎、武田久吉、高野鷹蔵とともに昼餐に招かれ、明治38(1905)年に日本山岳会を設立。大正4(1915)年に渡米し、昭和6(1931)年に帰国。日本山岳会初代会長となる。

注2 ウォルター・ウェストン (1861～1940)

イギリス人宣教師。ケンブリッジ大学卒業後、27歳のときに英国教会から派遣され布教のために来日。以後、来日は二回。明治21(1888)～28(1895)年の間、日本の山々を登り明治29(1896)年に、『日本アルプス—登山と探検—』を刊行。二回目の来日の帰国四日前に小島烏水と出会い、日本山岳会設立を促す。日本山岳会最初の名誉会員となる。大正6(1917)年に日本アルプスを世界に紹介した功績が認められ、イギリス地理学会バックグラウンド賞を受賞。日本近代登山の父と呼ばれ、昭和12(1937)年には、日本政府より勲四等瑞宝章が授与される。

注3 矢沢 米三郎 (1868～1942)

明治元(1868)年、長野県諏訪市中洲に生まれる。明治22(1889)年に長野県尋常師範学校を卒業後、同校訓導。東京高等師範学校を卒業後、長野県尋常師範学校教諭。明治26(1893)年に「長野博物学会」を創設(後に自然消滅)。明治35(1902)年に改めて「信濃博物学会」を結成、『信濃博物学雑誌』を創刊(第一次世界大戦のため大正5(1913)年に廃刊)。

ヒメミズニラ(野尻湖)、トガクシデンダ(戸隠)、クモマナズナ、ヒナリンドウ、ミヤマイチゴツナギ(以上、八ヶ岳)、カマナシシモツケ(釜無山)などの県内最初の採品をあげる。

注4 河野 齡蔵 (1865～1939)

慶応3(1865)年、長野県松本市島内に生まれる。明治22(1889)年に長野県尋常師範学校を卒業後、上水内高等小学校訓導、以後、北安曇高等小学校、松本尋常高等小学校に勤務。文部省植物科教員検定試験に合格。後に動物・生理衛生・図画科の試験にも合格。明治29(1897)年、大町で教員養成の講習の講師を兼任するため、大町尋常小学校校長と長野県師範学校助教諭を兼任。昭和14(1939)年に死去、74歳。

トガクシギク(戸隠)、ヒメウスユキソウ、ハハコヨモギ、ハクセンナズナ、ミヤマグルマ(以上、木曾駒ヶ岳)などの県内最初の採品をあげる。

植物と烏嶺

烏嶺は生涯で4,000種もの植物標本を作製したと言われ^{*7}、その標本は本人や長男の濟美氏などにより、植物友の会（現 社団法人 日本植物友の会）をはじめ、国立科学博物館（T S N）や牧野標本館（MAK）、栃木県の佐野高校資料室、そしてここ市立大町山岳博物館に収められた。

烏嶺が活躍した明治後期から大正初期の時代は植物探索が盛んで、矢田部良吉^{や た べりょうきち}や松村任三^{まつむらにんぞう}、牧野富太郎^{注5}などが研究のために長野県を訪れ、数々の成果品をあげていた。また、県内在住研究者では、明治30（1897）年8月から大町小学校の校長も歴任した教育者、河野齡蔵が『高山植物』や『高山植物の研究』、『日本高山植物図説』、『高山植物の培養』などを著し、白馬岳に限ってみてもウルップソウ、シロウマアサツキ、カライトソウ、オオサクラソウの県内最初の採品をあげている。また長野尋常師範学校などの教師を勤め、明治35（1902）年に信濃博物学会を創設した矢沢米三郎は、『中等新植物教科書』や『植物実験学』、『帝国植物提綱』、『日本高山植物名彙』などを著し、白馬岳でクモマミミナグサ、ミヤマハナワラビ、クモマキンポウゲ、ムカゴユキノシタなどの県内最初の採品をあげ、『信濃博物学雑誌』に研究の数々を発表している^{*8}。烏嶺の研究もまた、その雑誌に見ることができる^{*9,10}。

烏嶺の植物への関心は、生き立ちとその環境にあったようである。幼少の頃は病弱で、近所の子どもたちと嬉戯^{きぎ}することを好まず、独り鬱蒼^{うつそう}とした城山の山中に入っては草花に親しんだと言う。またランなどの栽培に熱中したのは、祖父の趣味による影響が大きかったようである^{*11}。

明治36（1903）年11月、長野中学に赴任。翌春、雪融けとともに休日となれば戸隠山や飯綱山に登り、高山植物の生品を暑中休暇までに70種ほど集め培養を始めた^{*1}。こうした高山植物研究の契機は、ドイツ留学の後、東京大学教授に就任した三好學^{注6}の「植物の垂直分布」に関する当時の見聞による^{*12}。任地の先々で好適な題材を選んで研究を重ねてきた烏嶺にとって、長野は高山植物研究の絶好のフィールドとなったのである。

明治37（1904）年8月、烏嶺は浅間山に登る。植物の少なさに失望したものの、頂上から見た八ヶ岳の雄姿に心ひかれ、旅程を変更して八ヶ岳に登ってしまう。硫黄岳^{い おう だけ}、横岳、赤岳までくまなく、ムシトリスミレの群落やチョウノスケソウ、ウルップソウ、アラシグサ、ハクサンイチゲ、ツクモグサ、コマクサ、ツガザクラ、イワウメ、チシマギキョウなどの生活状態を観察し、採集した^{*3}。

烏嶺は晩年、「目をとじて思いやる私のまぶたに、ありありと浮び出るのは、あのときに見た花々の姿です。そしてそれらがいっせいに咲きにおう、お花畑の壯観を初めて目にしたときの心のふるえが、私をこの世ならぬ別の世界にいざないます。五十年の歳月をもってしても、色あせることのない感動を与えた高山の

宝石—高山植物に、この八が岳登山で私はとりつかれたのでした。」と語っている^{※13}。八ヶ岳で鳥嶺は高山植物の研究に専念する決意をし、赤岳から遠く眺めた白馬連峰へと即刻、歩も心も向かうのであった。

明治37年8月の第一回白馬登山では、矢田部により産地秘匿とされていたトガクシショウマ（トガクシソウ）を絶崖に見つけて数株を採取したのをはじめ、この登山で採集した植物は180種にもものぼる。当時鳥嶺は自らも植物の同定を行っていたであろうが、山岳博物館に寄贈された標本の台紙には、「牧野博士検定」の走り書きがある。牧野とは、当時東京大学助手であった牧野富太郎のことである。鳥嶺は各地で植物を採集しては牧野の元へさく葉標本を送り、同定を依頼していたようである。鳥嶺の第一回白馬登山でシロウマオウギ（マメ科）やヒメウメバチソウ（ユキノシタ科）が新種であることを見出したのも牧野によるものであった^{※14,15}。

その時のシロウマオウギ（MAK130570）のさく葉標本（Syntype）は、現在、首都大学東京構内にある牧野標本館に収められ、一緒に採集されたと思われるシロウマオウギやヒメウメバチソウの標本は山岳博物館にも寄贈されている。また国立科学博物館には、鳥嶺が採集した少なくとも300点以上の標本が収蔵されていると思われ、第一回白馬登山で採集したツクモグサ（TSN124153）や第三回に採取したハゴロモグサ（TSN124148）やチョウノスケソウ（TSN124149）、を鳥嶺は、第20回さく葉展に出展、寄贈している。

その後、大正6（1916）年4月に台湾へ渡るまでの長野時代およそ13年間に、毎年の白馬岳のほか御嶽、木曾駒ヶ岳、乗鞍岳、槍ヶ岳、常念岳、大天井岳、燕岳、立山、尾瀬燧岳、飯豊山、磐梯山、那須岳、日光山、白根山、早池峰山、鳥海山、岩木山、恐山などに登り、植物採集と研究に精力を注いだ。

そして鳥嶺、最後の植物採集は昭和16（1941）年、67歳の時。谷川岳のミヤマウスユキソウであった^{※13}。

注5 牧野 富太郎（1862～1957）

文久2（1862）年、高知県高岡郡佐川村（現 佐川町）に生まれる。明治17年（1889）、東京大学職員大久保三郎とともに *Theligonum japonicum* Okubo et Makino（ヤマトグサ）の学名命名。この命名は日本人として2番目（日本人初となる学名命名は伊藤篤太郎（1868-1941）が発表した *Podophyllum japonicum* T. Ito トガクシショウマ（後に新属を立てて *Ranzania japonicum* (T. Ito) T. Ito と改める）となった。明治26（1893）年に東京大学助手となり、明治37（1904）年、鳥嶺が白馬岳で採集した標本に、シロウマオウギ、ヒメウメバチソウと命名。生涯で1,500種以上の学名命名を行い、そのうち、長野県内では、コマクサをはじめ、センジュガンピやカライトソウなど221種（亜種・変種・品種・間種を含む）にもおよぶ。

注6 三好 學（1861～1939）

文久元（1861）年、岩村藩・江戸藩邸で生まれる。幼年を岩村（現 岐阜県恵那市岩村町）で過ごし、18歳で、土岐小学校（現 瑞浪市立土岐小学校）校長に就任。その後、東京大学理学部生物学科を経て、大学院へと進む。在学中、ドイツ留学を命ぜられ、帰国後第二講座（植物生理学）の初代教授となる。植物学を植物生理学、植物形態学、植物分類学、植物生態学に区分し、我が国の植物生理学・生化学の基礎を作ったほか、ヨーロッパ流の植生研究を紹介した。サクラとショウブの世界的権威者であり、天然記念物保存事業の主唱者。東大教授在学中に発表した研究論文は100編にもものぼり、その成果は日本植物学会の雑誌にも多く見られる。

写真と烏嶺

最初の白馬登山で「2ダースほどの写真を撮った」と烏嶺は述懐している。現在では想像もつかないことであるが、明治30年代後期のカメラは組立暗箱式であり、機材一式で1貫目（約3.75kg）、感光材はフィルムではなくキャビネ判（約16.5×12cm）のガラス乾板、36枚（3ダース）でやはり1貫目、明るい光のもとでも露光に30分以上、後処理までに1枚1時間以上を要し一日6枚撮影が精一杯、写真機材だけで一人の荷担ぎを雇わなければならなかった、と聞けば理解できるだろう。烏嶺が愛用した、ドイツのゴルツ社ダゴールレンズは、烏嶺の月給の2ヶ月分、115円という高価なものでもあった^{*12,17}。

「山岳写真」を「山岳（高山）におもむいて撮られた写真」、その写真を撮影した人を「山岳写真家」と単純に定義したとして、わが国最初期の山岳写真家を以下に列記する^{*18}。

・松本、保里写真館の技師、安藤鶴一郎

明治29（1896）年にロンドンで出版されたウォルター・ウェストンの『日本アルプスの登山と探検』に、明治27年以前に撮影したと推定される写真が掲載されている。

・高頭式^{注7}・武田久吉・高野鷹蔵・辻村伊助・石崎光瑤・近藤茂吉・辻本満丸
・三枝威之介・加山竜之介・武井真澄・河野齡蔵・志村烏嶺・岩村円・青木紫嶺
・八木道之助・石田常平

上記の人々は、明治38（1905）年7月出版の小島烏水『日本山水論』、39年2月出版の高頭式編『日本山嶽志』、39年4月に創刊された日本山岳会の機関誌『山岳』の初期の号、明治43年から大正6年まで高野鷹蔵編集で日本山岳会から8集出された写真集『高山深谷』などに作品と名が登場する人物である。

いずれも烏嶺同様の苦勞のもとで作品を成したことであろう。

烏嶺に関しては、明治37年の第一回白馬登山で得た写真をいち早く園芸雑誌に発表し、それを契機に烏水の『日本山水論』や高頭の『日本山嶽志』、『山岳』創刊号の口絵を飾り、さらにはウェストンの手に渡って英国山岳会の機関誌『アルパインジャーナル』第23巻171号（明治39年2月発行）に杓子岳の写真が載るなど^{*1,13}、写真自体が貴重な当時、白馬をはじめ、読者のほとんどが未知の「山岳（高山）」を説明する時、「山岳写真」は大変な説得力をもつ希少な媒体であった。烏嶺も「写真の説得力」を最重視して、山に担ぎあげている。

「とにかく白馬という山は素晴らしいんですね。こういう立派な山は他の人にもいっぺん見せてやりたい。ところが持って行ってみせるには写真なんです。それからなんです。写真をやりはじめたのは。^{*12}」

自著、明治40（1907）年7月刊『やま』（前田曙山^{注8}共著）、明治42年3月刊『高山植物採集及培養法』、大正2（1913）年9月刊『千山萬岳』に多くの山の

写真を登載したのはもちろんであるが、明治42年の6月と8月に、わが国初といわれる山岳写真集『山岳美観』を2集出版していることは特筆に値する。四ツ切判コロタイプ印刷、各6図、印刷部数各約300という^{*12,17}。

注7 高頭 式 (1877～1958)

明治10 (1877) 年に新潟県三島郡の豪農に生まれる。号は仁兵衛 (にへい)。雑誌『太陽』を通じて小島烏水と知り合う。明治31 (1898) 年に富士山に登り、また、『日本風景論』を手にしたことでさらに登山意欲を強め、明治39 (1906) 年には自らが、『日本山嶽志』を発刊。本書は、日本の山岳地図・写真をはじめ、登山技術や地理・地質・気象などを解説した、山の百科事典とも評される。

明治31年秋、八海山や苗場山に登山したものの、家人から危険だと、登山を禁止されるが、明治38 (1905) 年に富士山、甲斐駒ヶ岳、乗鞍岳などに登り、翌39年には白馬岳、燕岳、槍ヶ岳などを登山。以後毎年、登山をし、大正5 (1916) 年には槍、穂高の逆縦走に初めて成功する。

日本山岳会創設時には財政面から強力な支援を行い、昭和8 (1933) 年に日本山岳会二代目会長を務めた。

注8 前田 曙山 (1871～1941)

明治4 (1871) 年に東京都に生まれる。本名は次郎。日本英学館に学び、小説家の道を歩み始める一方で、明治30年前後から白馬岳、針ノ木岳、立山、槍ヶ岳、常念岳、浅間山、戸隠山、飯綱山、黒姫山などに登山。高山植物や園芸に精通し、『高山植物叢書一・二巻』を発刊するとともに、園芸雑誌『園芸界』を主宰。また烏嶺と『やま』を共著。小説倶楽部や面白倶楽部にも人情小説や歴史小説を寄稿している。

登山と烏嶺

烏嶺は明治37（1904）年の春から長野市周辺の山々で高山植物採集を重ね、前田曙山しゅざいの主宰する園芸雑誌によく記事を掲載していた。高山植物栽培の流行によって烏嶺の知名度は高まり、同年夏以降（推定）には城数馬じょうかずま^{注9}と知り合い、高山植物や写真を寄贈している^{※19}。

一方、同年8月の第一回白馬登山で得た杓子岳の写真は、同じ園芸雑誌に高山植物の記事とともに掲載され、まずウォルター・ウェストンが注目し、その入手方法を小島烏水に照会した。そこで小島は前田を通じて烏嶺の了解をとり、上京していた高頭式が小島の依頼を受けて新潟への帰郷途中に長野の烏嶺を訪ねたという。それは明治38（1905）年4月のことという。この時、烏嶺は各々に3葉の写真を贈っている^{※1}。

城数馬、小島烏水、高頭式は38年10月に設立される山岳会（後の日本山岳会）の発起人となる人々。烏嶺は高山植物と山岳写真が縁で、急速に日本登山界の仲間入りをする。後の著書『千山萬岳』にウェストンが序文を寄せているのも、こうした機縁きえんによる山岳会創立直前の38年夏、高頭の運営資金負担の申し出に、高頭の人物を疑った城が身元調査に出かけようとするのを烏嶺が制して、長野市で三者会談に及んだ。

会談中、最初は原稿が集まらぬから山岳会を日本博物学同志会の支会として発足するという案に、烏嶺は「自分独りでも雑誌の半分位は受け持つと壮語し」どこまでも反対したが容れられなかった、というエピソードもあった^{※19}。

明治40年代から大正2年頃は著述も盛んで、先の園芸雑誌のほか、単行本、新聞連載等により高山植物の魅力、山岳美、登山行為の普及啓発にあたっている。これは長野中学在職時代の登山が最も充実していた時期にあたる。在校生に呼び継がれた烏嶺のあだ名は単刀直入、「山の志村」、「山アラシ」であった^{※13}。

登山歴のうち、明治40（1907）年7月から8月にかけての中房温泉・乗越峠・ブナ立尾根經由の烏帽子岳えぼしだけ～鷲羽岳わしぼだけ往復は、「登山者としては初期の縦走形式の登山」であったという^{※5}。

大正5（1916）年4月、13年近い長野時代を終え、台湾の台中中学校へ赴任。自らの新聞記事が中心のスクラップブック『烏嶺文集』の大正4年の記事「日本アルプス蓮華の大池（一）」で、葱平を下る学習院の生徒の「現代劇の舞台へでも出る様な」格好を見て嘆き、「自分が始めて登山した頃は麓の林も頂上の草原も全く太古のまゝの自然であつたが此御山も近年は非常に俗になつたと自分の云ふ言葉の終らぬ内に、人夫は旦那俗だの何のと云つても我等（わしら）は一人でも登山者が殖えて、一貫でも余計な酒（さか）銭（で）が取れゝばよい オー始めて此御山へ来た頃は、仙人の様であつた御前達も、情ない根性になつたものだ、ツクヅク此山も嫌になつた、年々暑中休暇には、帰省でもする様な気持ちで登山した

が、来年からは登るまい」と述べている。烏嶺の啓発の思いや意図をはるかに越えて、登山の大衆化は急テンポだったようである。

大正11（1921）年台湾から帰国後、北アルプスへは一步も足を踏み入れなかった。その烏嶺が、車窓から見た後立山連峰に「矢も盾もたまらなく」なり、昭和31（1956）年、家族に無断で41年ぶりに白馬に登っている。82歳にして13回目、最後の白馬であった。

注9 城 数馬（1864～1924）

元治元（1864）年、久留米藩士の家に生まれる。司法省法学校を経て帝国大学法科大学仏法学科を卒業した後、弁護士として活躍。明治33（1900）年、植物愛好家であり植物画家・五百城文哉（いおき・ぶんさい）とともに、日光の女峰山で、ニョホウチドリ *Orchis joo-iokiana* Makino (MA K000166) を発見。同定を牧野富太郎が行ない、新種として1902年に発表 (Botanical Magazine Tokyo16:57-58)。明治35（1902）年、山草会を結成。同年5月には五百城らとともに、東京の本郷団子坂下の植木屋・薫風園で、山草陳列会を開催。同年7月、八ヶ岳へ登山した際に、ツクモグサやミヤマツメクサ、クモナズナを発見、ウルップソウが八ヶ岳にも生育することを見出した。日本山岳会結成にあたっては、発起人の後見役を務めた。

烏嶺略年譜

(敬称略)

西暦	和暦	月日	年齢	内 容	出 典
1874	明治7	2, 5		栃木県那須郡烏山町(現 那須烏山市)に、父・真澄、母・ユウの長男として生まれる 本名 寛	*16
1892	明治25	4, 4	18	栃木県尋常師範学校尋常師範学科入学	*20
		8,		日光白根山登山	*16
1893	明治26	8,	19	那須岳登山	*20
1896	明治29	3, 28	22	同師範学校卒業 小学校本科正教員免許状が下附され、以降、栃木県内の小学校訓導として勤務	*16
1898	明治31	6, 3	24	師範学校中学校高等女学校の地誌科地文科教員免許状が下附される	*20
1899	明治32	4, 15	25	宇都宮の栃木県第一中学校に助教諭として勤務	*16
		5,		文部省教員検定予備試験植物科合格	*16
		8, 14~		文部省夏期講習会において博物科(動物植物)受講	*20
		12,		文部省教員検定予備試験生理科合格	*16
1900	明治33	10, 31	26	栃木県第一中学を休職	*20
		11, 1		佐野町(現佐野市)の私立東明学舎に嘱託講師として勤務	*20
1901	明治34	4, 1	27	佐野町の栃木県第四中学校に教諭として勤務	*20
		9, 28		水戸の茨城県師範学校に博物科教師として赴任	*20
1902	明治35	2, 15	28	植物科、動物生理衛生科の文部省教員検定に合格	*20
				この頃、水戸市内の営業写真家草野金松らから写真術を習得する	*20
				夏、富士登山 悪天候のため五合目まで	*20
1903	明治36	3, 31	29	仙台の宮城県第一中学校へ転任	*20
				この頃、近い将来の外国留学の夢を抱き、ドイツ語や英語の習熟に励む	*20
		11, 24		長野県長野中学校に博物、地理の教師として赴任 この頃、ドイツ帰りの植物学者、三好学に触発されて「植物の垂直水平分布」	*16 *3 *19
1904	明治37	3,	30	宇都宮にて、森川タケと結婚	*16
		4, ~		雪融けとともに、休日ごとに飯綱山、戸隠山などに植物採集行を重ねる 夏期休暇までに約70品種を培養	*1
		7,		夏期休暇に神奈川県三崎の帝大臨海実験所で、3週間の海産標本採集と実験に従事	*16 *3
		8,		浅間山に続き、旅程を変更して八ヶ岳登山 横岳にて高山植物研究に専念する決心をする	*3
		8,		初の白馬岳登山 後に新種とされるヒメウメバチソウ、シロウマオウギを採集、写真撮影 以降大正4年まで毎年白馬に登る	*16 *2
1905	明治38	4,	31	長野を訪ねた高頭式に、高頭・小島烏水・ウェストンあての写真を3葉ずつ寄贈する	*1
				夏、山岳会(後の日本山岳会)の発起人となる城数馬と高頭式を長野市内で引き合わせ、鼎談する	*19
		7, 1		小島烏水『日本山水論』出版 烏嶺の写真が3葉載る	
		9,		8月に雨のため登頂を断念した白馬に登る 地元民の「迷信」による登山妨害あり	*2
		10,		山岳会(後の日本山岳会)発足 入会 会員番号18番	*16
		11,		長野市内の写真展覧会で、善光寺の裏で撮影し全紙二倍に伸ばした「朝霧」が投票で一等となる	*16 *19
1906	明治39	2,	32	英国山岳会の機関誌『アルパインジャーナル』第23巻171号に、ウェストンの記事とともに烏嶺の杓子岳の写真が載る	
		2, 4		高頭式編『日本山嶽志』出版 「小島烏水所蔵」として杓子岳の写真が載る	
		4, 5		山岳会機関誌『山岳』第1年第1号発刊	
		8,		高頭式らと「アルプス三大横断」登山(蓮華温泉経由の白馬岳、針ノ木越え立山、燕岳~槍ヶ岳縦走)	*1 *2

西暦	和暦	月日	年齢	内 容	出 典
1907	明治40	7, 15	33	前田曙山との共著『やま』出版	
		7,		7月28日より烏帽子岳～鷲羽岳縦走（往復）	*21
		8,		中旬より岩手山、岩木山、恐山など東北の山々に登山	*1
1908	明治41	5, 17	34	地学協会で行なわれた第1回山岳会大会において、幻灯（スライド）をまじえ「日本アルプス雑感」と題し講演	*1
		7,		御岳、木曾駒ヶ岳登山	*1 *21
		8,		中旬より早池峰山、鳥海山登山	*1
1909	明治42	3, 10	35	『高山植物採集及培養法』出版	
		6,		『山岳美観』第1集出版	*16 *12
		8,		『山岳美観』第2集出版	*16 *12
1912	明治45	8,	38	御岳、加賀白山登山	*16
1913	大正2	9, 10	39	『千山萬岳』出版	
1916	大正5	4,	42	台湾の台中中学校へ赴任	*16
		7, 8		妻タケ急逝	*16
1917	大正6	8,	43	丹羽滋と再婚	*16
1918	大正7	4,	44	新高山登山	*16
1922	大正11	5,	48	帰国 26年余の教師生活を終え、東京の目黒にて植物園「素香園」を経営する	*16
1923	大正12	9,	49	日本山岳会事務所が関東大震災被災のため、一時期目黒の烏嶺宅に移る	*16
1924	大正13		50	岩崎家（三菱）の箱根別邸の庭園にロックガーデンを設計施工する	*16
				埼玉県の横曽根村（現川口市）に転居 農園を経営	*16
1941	昭和16		67	谷川岳登山 ミヤマウスユキソウを採集 最後の植物採集となる	*16
1954	昭和29		80	東京都新宿区下落合に転居	*16
		12, ~		植物標本4000種を「植物友の会」に寄贈、との報道	*3 *7
1955	昭和30	11, 26	81	日本山岳会創立50周年記念晩餐会において、秩父宮妃殿下の御前で「白馬五十年」のスピーチ	*16
1956	昭和31	8,	82	13回目の白馬岳登山 登頂に成功	*22
1961	昭和36	3, 7	87	逝去（87歳1ヶ月）	*16
1985	昭和60	11, 15		長男、志村濟美氏より市立大町山岳博物館が関係資料の寄贈を受ける	

※年齢は誕生日をもつての満年齢

展示図版説明



1-1 『やま』

(当館 蔵)



1-2 『岳人』第110号

(当館 蔵)



2-1 (左上) シロウマオウギ植物標本 (当館 蔵)

2-2 (中央上・右上) 牧野が新種とした元記載

2-3 (左) シロウマオウギ (マメ科)

日本固有種。本州 (雨飾山、北アルプス、南アルプス、八ヶ岳) の高山対の開けた草地に生える多年草

(2002. 7. 25 葱平にて撮影)





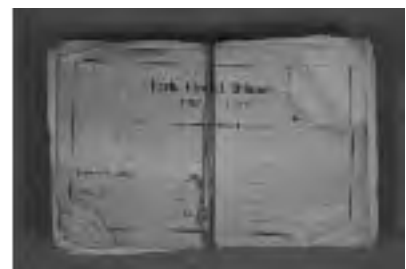
2-4 (左) ヒメウメバチソウ植物標本 当館 蔵
2-5 (中央・右) 牧野が新種とした元記載



2-6 牧野同定の植物標本 当館 蔵



2-7 標本ノート 当館 蔵



2-8 植物標本ラベル 当館 蔵



2-9 第20回さく葉展展出展標本 国立科学博物館 蔵



2-11 植物図鑑 当館 蔵

2-10 トガクシショウマ (メギ科) 当館 蔵



2-12 『高山植物採集及培養法』 (左下) と印刷見本 (中央下) 当館 蔵

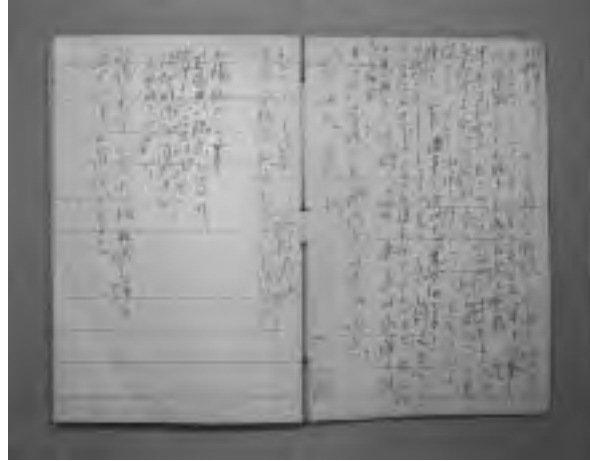


2-13 (右上下) 『中学生時代』 当館 蔵





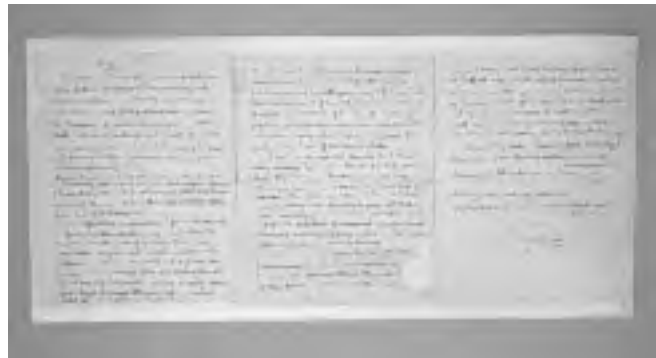
3-1 (左) 『山岳』第50年号
当館 蔵



3-2 (右) メモノート 当館 蔵



3-3 『千山萬岳』 当館 蔵



3-4 『千山萬岳』序文
ウォルター・ウェストン筆 原本 当館 蔵



3-5 『文集』 当館 蔵



3-6 『山岳』第一年一号 当館 蔵



4-1 白馬大雪渓 当館 蔵



4-2 鑓ヶ岳温泉付近 当館 蔵



4-3 『アルパイン・ジャーナル』 当館 蔵



4-4 『日本山嶽志』 当館 蔵



4-5 『日本山水論』 当館 蔵

展示資料目録・資料解説

※ ここに挙げた資料は主な展示資料である

- 1-1 『やま』《左は清水悟郎旧蔵、右は烏嶺旧蔵》 当館 蔵
志村烏嶺・前田曙山 共著。明治40（1907）年7月15日 橋南堂 発行。ハンドブックとしての携帯を配慮してか、ホックどめの装丁が奇抜。主に明治39年までの登山記で構成されている。
- 1-2 『岳人』第110号 当館 蔵
昭和32（1957）年6月1日 中部日本新聞 発行。83歳の志村烏嶺のポートレートと、前年82歳にして13回目の白馬登山を契機に書かれた。「白馬五十年 八十三翁が語る登山今昔」が載る。
- 2-1 シロウマオウギ植物標本 牧野標本館 蔵
第一回白馬登山で葱平付近にて採集した新種。牧野富太郎に同定を依頼。
- 2-2 牧野が新種とした元記
牧野が烏嶺から送られてきた標本を元に1906年に新種シロウマオウギとして、植物学雑誌Vol. 20 (No. 229) (日本植物学会) に発表。
- 2-3 シロウマオウギ (マメ科) 当館 撮影
日本固有種。本州 (雨飾山、北アルプス、南アルプス、八ヶ岳) の高山対の開けた草地に生える多年草。烏嶺が採集した葱平では今でも本種の生育を見ることができる。(2002. 7. 25 葱平にて)
- 2-4 ヒメウメバチソウ植物標本 当館 蔵
第一回白馬登山で葱平付近で採集した新種。
- 2-5 牧野が新種とした元記載
牧野に同定を依頼し、牧野が1904年、植物学雑誌Vol. 18 (No. 214) (日本植物学会) で新種として発表。
- 2-6 牧野同定の植物標本 当館 蔵
烏嶺は各地で植物を採集しては牧野に同定を依頼していたことがわかる。
- 2-7 標本ノート 当館 蔵
採集した植物標本を整理する際に作成されたリストと思われる。
- 2-8 植物標本ラベル 当館 蔵
烏嶺オリジナルの植物標本ラベル。
- 2-9 第20回さく葉展出展標本 国立科学博物館 蔵
第一回 (ツクモグサ; TSN124148) および三回 (ハゴロモグサ; TSN124148, TSN124153) 白馬登山で採集した植物。出展後に寄贈。国立科学博物館には少なくとも烏嶺が採取した300点以上の標本が収蔵されていると思われる。
- 2-10 トガクシショウマ (メギ科) 《参考展示》 当館 蔵
矢田部により産地秘匿とされていた本種を第一回白馬登山の際に発見し、烏嶺は「幸先が良い」と大いに喜んだと言われる。
- 2-11 『日本高山植物図鑑』第4版 当館 蔵
武田久吉・田邊和雄・竹中要 共著。昭和28（1953）年5月25日 北隆館 発行。随所にメモ書きがあり、晩年の愛用品と思われる。
- 2-12 『高山植物採集及培養法』と印刷見本 当館 蔵
烏嶺 著。明治42（1909）年3月10日 成美堂書店 初版発行。これは同年5月10日再版本。主に明治39年までの登山記で構成されている。
印刷見本は著者校正用と思われる、最後のページに「Oct. 4. 校了」の朱書がある。
- 2-13 『中学生時代』 当館 蔵
昭和30（1955）年4月1日 旺文社 発行。志村烏嶺81歳の記事。植物好きだった祖父の影響、高山植物との出会い、登山のエピソードなどを記載。

-
- 3-1 『山岳』第50年号 当館 蔵
昭和32（1957）年7月1日 日本山岳会 発行。烏嶺 志村寛「日本山岳会創立前後之見聞」掲載。
- 3-2 メモノート 当館 蔵
『山岳』第50年号（1957）に載った「日本山岳会創立前後之見聞」の下書きと考えられる。記述など、晩年の筆記を主とするノート。
- 3-3 『千山萬岳』 当館 蔵
烏嶺 著。大正2（1913）年9月10日 嵩山房 発行。ウェストン直筆序文と和訳がある。明治40年以降の登山記と論文で構成されている。大正4年の「日本アルプス 蓮華の大池」（一）～（四）、明治44年7月15日から信濃毎日新聞掲載の「山！山！志村烏嶺氏談」（一）～（四）、大正7年の新高山登山に関する一連の台湾新聞記事などがある。
- 3-4 『千山萬岳』序文 ウォルター・ウェストン筆 原本 当館 蔵
烏嶺の『千山萬岳』の刊行にあたり、ウォルター・ウェストンが寄稿した直筆文。
- 3-5 『文集』 当館 蔵
新聞に掲載された自著記事の切り抜きが中心のスクラップブック。冒頭は明治43年1月1日から信濃毎日新聞掲載の「元旦の花」（上）・（下）、以下、貼付順に大正2年1月10日がその（三）となる国民新聞連載の「日本アルプス」（一）～（五）、大正4年の「日本アルプス 蓮華の大池」（一）～（四）、明治44年7月15日から信濃毎日新聞掲載の「山！山！志村烏嶺氏談」（一）～（四）、大正7年の新高山登山に関する一連の台湾新聞記事などがある。
- 3-6 『山岳』第一年一号 当館 蔵
明治39（1906）年4月5日 山岳会 発行。巻頭口絵写真は「白馬山腹の大雪溪 烏嶺 撮影」。
- 4-1 白馬大雪溪 当館 蔵
烏嶺が第一回白馬登山で撮影。写真には1907年に『アルパイン・ジャーナル』23巻5月号に初めてヨーロッパで紹介されたとの自筆がある。
- 4-2 鑓ヶ岳温泉付近 当館 蔵
第一回白馬登山で撮影。写真には同行した県立長野中学校職員 清水市太郎・案内人 丸山広太郎、丸山吉十の名が烏嶺によって記されている。
- 4-3 『アルパイン・ジャーナル』第23巻171号 当館 蔵
明治39（1906）年2月にウェストンの日本北アルプス登山と日本山岳会に関する記事とともに掲載された（烏嶺は晩年まで一貫して「第23巻5月号掲載」と記述している）。これが国外で初めて紹介された白馬山系の山の写真とされる。明治38（1905）年4月、前田曙山、高頭式を介して小島烏水が入手、ウェストンに渡った。
本書は中山琬一 著『山岳宗徒烏嶺小伝』（1989）
本書によると、原本は片山繁氏所蔵で烏嶺が日本山岳会に寄贈。ページ右側には烏嶺の自筆が認められる。
- 4-4 『日本山嶽志』 当館 蔵
高頭 式 編。明治40（1907）年7月15日 橋南堂 発行。第17図に烏嶺の杓子岳の写真がある。
「白馬嶽ノ絶巔及ビ大残雪 明治三十七年八月二十日 烏嶺 撮影。小島烏水所蔵」と説明されているが、凡例の図版解説には、「此図ハ「子ブカタヒラ」ヨリ杓子ヶ嶽ヲ望ムモノニシテ白馬嶽ニアラズ此ニ訂正ス」とある。明治38年4月、前田曙山、高頭式を介して小島烏水に渡った写真である。
- 4-5 『日本山水論』 当館 蔵
小島烏水 著。明治38（1905）年7月1日 隆文館 発行。口絵写真のうち3葉が烏嶺撮影。

展示さく葉標本 — 白馬岳 —



ミヤマアズマギク(キク科)
Erigeron thunbergii

■漢字 深山東菊

■分布

日本では、北海道(利尻山、ポロヌプリ山、知床山地、大雪山系、夕張山地、日高山地、増毛山地、余市岳、徳舜警岳、ホロホロ山、ニセコ、太平山、狩場山、大千軒岳)、本州(早池峰山、八幡平、男鹿半島、大白森山、野反、白馬山系)の高山帯の礫地や礫まじりの草地に生える



チシマヨモギ(キク科)
Artemisia unalaskensis

■漢字 千島蓬

■別名 エゾオオヨモギ

■分布

日本では、北海道(利尻島、夕張山地、アポイ岳、根室地方、釧路地方)、本州(北アルプス、南アルプス、ハヶ岳)の高山帯の開けた草地や礫地に生える



ミヤマオトコヨモギ(キク科)
Artemisia keiskeana

■漢字 深山男蓬

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(群馬県、新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県、岐阜県、静岡県)の亜高山帯～高山帯の岩場や礫地に生える

☐ よみがえる高嶺の草花



タカネヤハズハハコ(キク科)

Anaphalis lactea

■漢字 高嶺矢筈母子 ■別名 タカネウスユキソウ

■分布

日本では、北海道(白鳥山、坊主山、和寒)、本州(早池峰山、北アルプス、南アルプス)の高山帯の礫地や乾いた草地に生える



チシマガキョウ(キキョウ科)

Campanula chamissonis

■漢字 千島桔梗

■分布

日本では、北海道、本州(青森県を除く東北地方～中部地方)の高山帯の礫地や岩場に生える



ハクサンシャジン(キキョウ科)

Adenophora campanulata subsp. *aperticampanulata*
f. *violacea* *Artemisia keiskeana*

■漢字 白山沙蔘 ■別名 タカネツリガネニンジン

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、北海道、本州(中部地方以北)の亜高山帯～高山帯の開けた草地に生える



タカネマツムシソウ(マツムシソウ科)
Scabiosa japonica var. *alpina*

■漢字 高嶺松虫草 ■別名 ミヤママツムシソウ

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(東北地方南部～中部地方)の高山帯の草地や礫地に生える



ハクサンオミナエシ(オミナエシ科)
Patrinia triloba

■漢字 白山女郎花 ■別名 コキンレイカ

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(東北～北陸地方)の山地～亜高山帯の岩場や草原に生える



オオヒョウタンボク(スイカズラ科)
Lonicera tschonoskii

■漢字 大瓢箪木 ■別名 オノエヒョウタンボク

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(関東地方北部、中部地方)の亜高山帯～高山帯に生える

☐ よみがえる高嶺の草花



ケナシハクサンオオバコ(オオバコ科)
Platago hakusanensis

■漢字 毛無白山大葉子

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(秋田県～立山・白馬岳の日本海側)の亜高山帯～高山帯の湿った草地や流れの縁に生える



ミヤマクワガタ(ゴマノハグサ科)
Veronica schmidtiana var. *senanensis*

■漢字 深山鋏形 ■別名 シナノクワガタ

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(中部地方以北)の高山帯の礫地に生える



ミヤマシオガマ(ゴマノハグサ科)
Pedicularis apodochila

■漢字 深山塩竈

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、北海道(大雪山系、日高山地)、本州(東北地方～中部地方)の高山帯の砂礫地に生える



タテヤマウツボグサ(シソ科)
Prunella prunelliformis

■漢字 立山靱草

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(中部地方以北の日本海側)の亜高山帯～高山帯の草地に生える



ミソガワソウ(シソ科)
Nepeta subsessilis

■漢字 味噌川草

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、北海道、本州(中部地方以北、奈良県)、四国(石鎚山)の低山帯～高山帯の溪流沿いや湿った草地に生える



ミヤマムラサキ(ムラサキ科)
Eritrichium nipponicum

■漢字 深山紫

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(谷川連峰、戸隠山地、美ヶ原、北アルプス、南アルプス)の亜高山帯～高山帯の岩場や砂礫地に生える

☐ よみがえる高嶺の草花



イワイチョウ(ミツガシワ科)
Fauria crista-galli

■漢字 岩銀杏

■分布

日本では、北海道、本州(東北地方、中部地方の日本海側)、南千島の亜高山帯～高山帯の雪田跡や湿地に生える

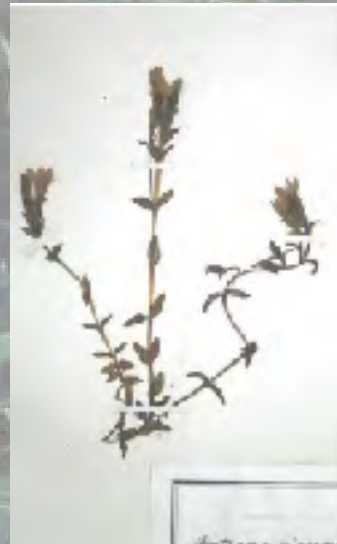


ハツポウタカネセンブリ(リンドウ科)
Swertia tetrapetala var. *happoensis*

■漢字 八方高嶺千振

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(八方尾根)の山帯の蛇紋岩地に生える

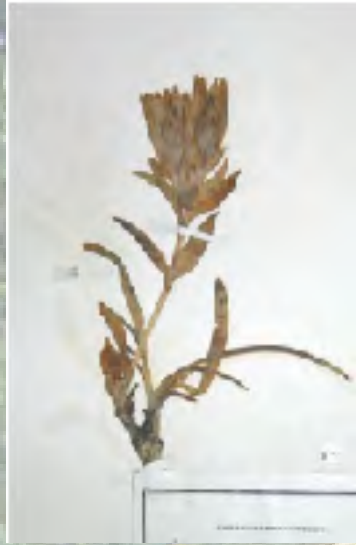


ミヤマリンドウ(リンドウ科)
Ggentiana nipponica

■漢字 深山竜胆

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、北海道(暑寒別岳、夕張山地、大雪山系、日高山地)、本州(東北地方～中部地方)高山帯の湿った草地に生える

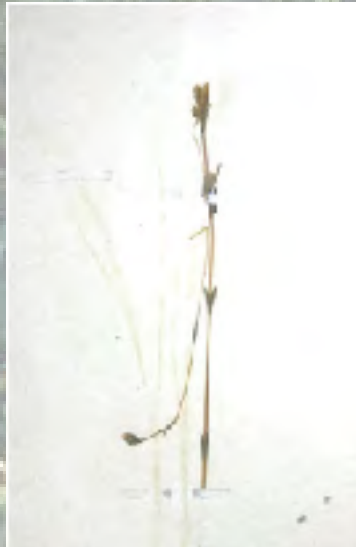


トウヤクリンドウ(リンドウ科)
Gentiana algida

■漢字 東薬竜胆 ■別名 エゾトウヤクリンドウ
クモイリンドウ

■分布

日本では、北海道(羊蹄山、大雪山系)、本州(月山、尾瀬、関東地方北部、中部地方)の高山帯の砂礫地や乾いた草地に生える



タテヤマリンドウ(リンドウ科)
Gentiana thunbergii f. *minor*

■漢字 立山竜胆 ■別名 コミヤマリンドウ

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、北海道(石狩地方)、本州(中部地方以北の日本海側、三重県)の亜高山帯～高山帯の湿地に生える



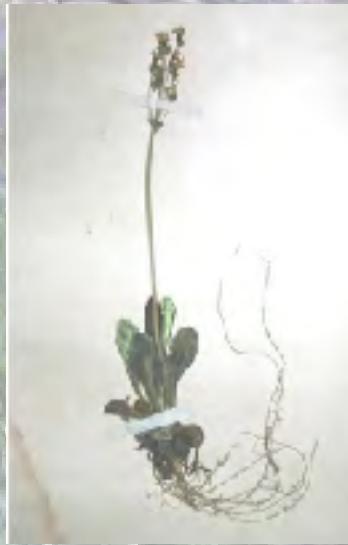
オヤマリンドウ(リンドウ科)
Gentiana makino

■漢字 御山竜胆

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(東北地方南部～中部地方)の亜高山帯～高山帯に生える

☐ よみがえる高嶺の草花



ユキワリソウ(サクラソウ科)
Pimula modesta

■漢字 雪割草

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、北海道(夕張地方、札内岳)、本州(関東地方北部、中部地方)、四国(石鎚山、東赤石山など)の低山帯～亜高山帯の岩場や乾いた草地に生える

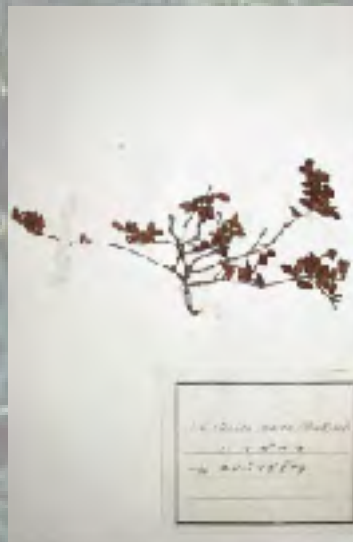


ツガザクラ(ツツジ科)
Phyllodoce nipponica

■漢字 柊桜

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(東北地方南部～中部地方、奈良県、鳥取県)の亜高山帯～高山帯の風の強い岩場に生える



コメバツガザクラ(ツツジ科)
Arctericca nana

■漢字 米葉柊桜

■分布

日本では、北海道、本州(東北地方、関東地方北部、中部地方、大峰山、氷ノ山、大山)の高山帯の風当たりの強い岩場や岩隙に生える



アカモノ(ツツジ科)
Gaultheria adenothrix

■漢字 赤物

■別名 イワハゼ

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、北海道、本州(近畿地方以東、大山、道後山、三段峡など)の低山帯～高山帯下部の林縁に生える



イワウメ(イワウメ科)
Diapensia lapponica subsp. *obovata*

■漢字 岩梅

■分布

日本では、北海道、本州(中部地方以北)の高山帯の岩場に生える



ハクサンボウフウ(セリ科)
Peucedanum multivittatum

■漢字 白山防風

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、北海道、本州(中部地方以北)の亜高山帯～高山帯の開けた草地に生える

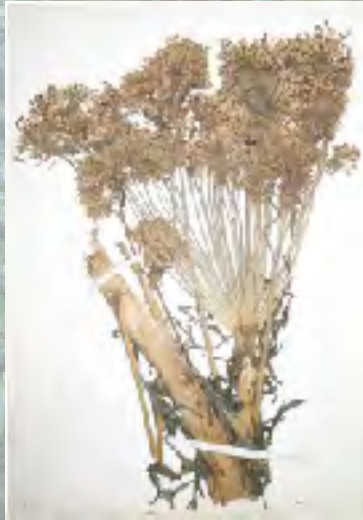


ミヤマゼンゴ(セリ科)
Coelopleurum multisectum

■漢字 深山前胡 ■別名 ミヤマゼンコ

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(中部地方)の高山帯の砂礫地に生える



オオカサモチ(セリ科)
Pleuropermum camtschaticum

■漢字 大傘持

■分布

日本では、北海道、本州(中部地方以北)の低山帯～高山帯下部の開けた草地に生える



シラネニンジン(セリ科)
Tilingia ajanensis

■漢字 白根人参 ■別名 チシマニンジン

■分布

日本では、北海道、本州(中部地方以北)の亜高山帯～高山帯の草地や湿原に生える



ハクサンサイコ(セリ科)
Bupleurum nipponicum

■漢字 白山柴胡

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(中部地方以北)の亜高山帯～高山帯の開けた草地に生える



ミヤマアカバナ(アカバナ科)
Epilobium foucaudianum

■漢字 深山赤花

■分布

日本では、北海道、本州(中部地方以北)の高山帯の礫地や流れに沿って生える



クモスマシレ(スミレ科)
Viola crassa var. *alpicola*

■漢字 雲間堇

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(北アルプス、中央アルプス)の高山帯の礫地に生える

☐よみがえる高嶺の草花



シナノオトギリ(オトギリソウ科)
Hypericum kamschaticum var. *senanense*

■漢字 信濃弟切 ■別名 ミヤマオトギリ

■分布

日本のみが生え(日本固有種)、本州(東北地方南部、関東地方北部、中部地方)の亜高山帯～高山帯の林縁や開けた草地、砂礫地に生える



アカミノイヌツゲ(モチノキ科)
Ilex sugerokii var. *brevipedunculata*

■漢字 赤実の犬黄楊 ■別名 アカツグ
ミヤマクロソヨゴ

■分布

日本では、北海道、本州(東北地方、関東地方北部～近畿地方～中国地方の日本海側)の低山帯～亜高山帯の湿った草地に生える



ハクサンフウロ(フウロソウ科)
Geranium yesoense var. *nipponicum*

■漢字 白山風路 ■別名 アカヌマフウロ

■分布

日本のみが生え(日本固有種)、本州(中部地方以北、滋賀県)の亜高山帯～高山帯の開けた草地に生える



オヤマノエンドウ(マメ科)
Epilobium foucaudianum

■漢字 深山赤花

■分布

日本では、北海道、本州(中部地方以北)の高山帯の礫地や流れに沿って生える



タイツリオウギ(マメ科)
Astragalus membranaceus

■漢字 綱釣黄耆

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、北海道(大雪山系、太平山)、本州(北アルプス、南アルプス、八ヶ岳、富士山)の高山帯の開けた草地に生える



ミヤマキンバイ(バラ科)
Potentilla matsumurae

■漢字 深山金梅

■別名 オクミヤマキンバイ

■分布

日本では、北海道、本州(中部地方以北)の高山帯の砂礫地や草地に生える

☐ よみがえる高嶺の草花



チョウノスケソウ(バラ科)
Dryas octopetala var. *asiatica*

■漢字 長之助草 ■別名 ミヤマゲルマ
ミヤマチングルマ

■分布

日本では、北海道(礼文島、ポロヌプリ山、大雪山系、夕張山地、日高山地、太平山)、本州(北アルプス、南アルプス、八ヶ岳、中央アルプス宝剣岳)の高山帯の砂礫地に生える



ミヤマダイコンソウ(バラ科)
Geum calthifolium var. *nipponicum*

■漢字 深山大根草

■分布

日本では、北海道、本州(中部地方以北、大峰山、石鎚山)の高山帯の風当たりの強い岩場に生える

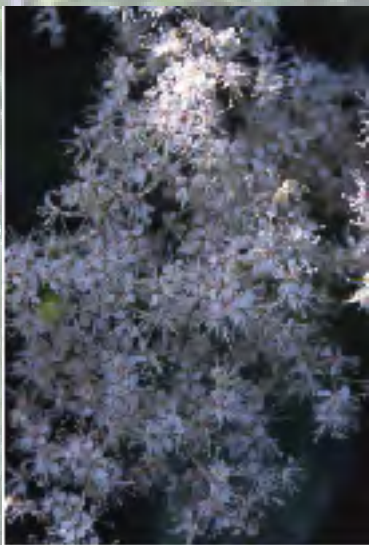


ノウゴイチゴ(バラ科)
Fragaria iinumae

■漢字 能郷苺 ■別名 ノウゴイチゴ

■分布

日本では、北海道、本州(東北地方、関東地方～中部地方の日本海側、大山)の低山帯～亜高山帯の湿った草地や林縁に生える



オニシモツケ(バラ科)
Filipendula kamtschatica

■漢字 鬼下野

■分布

日本では、北海道、本州(東北地方、関東～中国地方の日本海側、奈良県)の低山帯～亜高山帯の湿った草地や谷川ほとりに生える

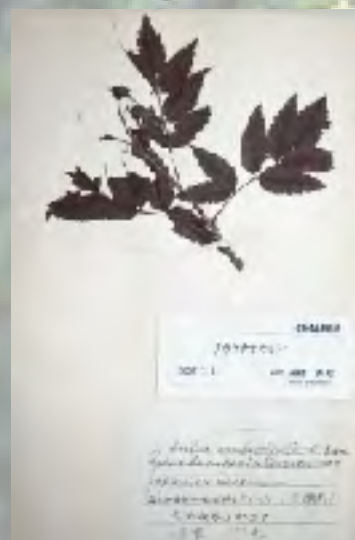


カライトソウ(バラ科)
Sanguisorba hakusanensis

■漢字 唐糸草

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(北アルプス、白山、滋賀県三国山)の亜高山帯～高山帯の砂礫地や乾いた草地に生える



タカネナナカマド(バラ科)
Sorbus sambucifolia

■漢字 高嶺七竈 ■別名 オオミヤマナナカマド

■分布

日本では、北海道、本州(中部地方以北)の高山帯の林縁や草地に生える

☐ よみがえる高嶺の草花



クロクモソウ(ユキノシタ科)
Saxifraga fusca var. *kikubuki*

■漢字 黒雲草

■別名 キクブキ
イワブキ

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(中部地方以北、大峰山系)、四国(剣山、瓶ヶ森、石鎚山)の低山帯～高山帯の湿った草地や流れに沿った岩上に生える

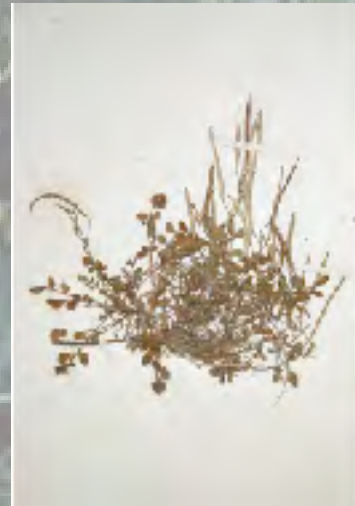


ウメハタザオ(アブラナ科)
Arabis serrata f. *grandiflora*

■漢字 梅旗竿

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(月山、飯豊山、至仏山、日光白根山、北アルプス、南アルプス)の高山帯の砂礫地や岩場に生える



ミヤマタネツケバナ(アブラナ科)
Cardamine nipponica

■漢字 深山種子漬花

■別名 ミヤマガラシ

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、北海道、本州(東北地方、中部地方)の高山帯の流れ沿いの砂礫地に生える



ハクサンイチゲ(キンポウゲ科)
Anemone narcissiflora var. *nipponica*

■漢字 白山一花

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(中部地方以北)の高山帯の乾いた草地に生える

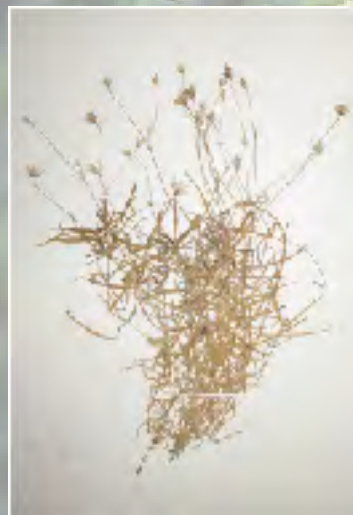


ミヤマトリカブト(キンポウゲ科)
Aconitum nipponicum subsp. *nipponicum*

■漢字 深山鳥兜 ■別名 ハクサントリカブト
オチクラブシ
ホクロトリカブト

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(月山、朝日山地、飯豊山、劔沢、劔岳、浄土山、薬師岳、黒部五郎岳、乗鞍岳、白山)の亜高山帯～高山帯の草地に生える



イワツメクサ(ナデシコ科)
Stellaria ruscifolia

■漢字 岩爪草 ■別名 オオバツメクサ

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、本州(北アルプス、中央アルプス、南アルプス、八ヶ岳、富士山、白山)の高山帯の砂礫地に生える

☐ よみがえる高嶺の草花

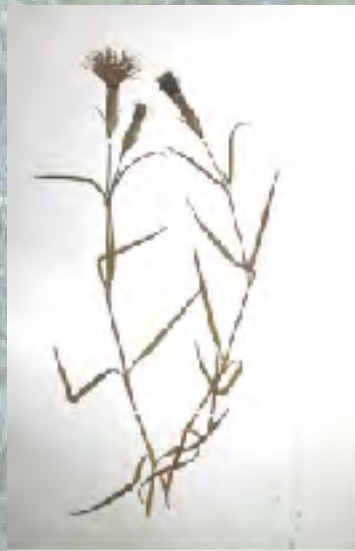


シコタンハコベ(ナデシコ科)
Stellaria ruscifolia

■漢字 色丹繁縷 ■別名 ネムロハコベ

■分布

日本では、北海道(利尻島、ニセイカウシュッペ山、富良野岳、阿寒山系、知床半島、羊蹄山)、本州(日光、浅間山、北アルプス、南アルプス、八ヶ岳)の高山帯の岩場に生える



タカネナデシコ(ナデシコ科)
Dianthus superbus var. *speciosus*

■漢字 高嶺撫子 ■別名 オノナデシコ
クモイナデシコ

■分布

日本では、北海道、本州(中部地方以北)の高山帯の礫地や岩場に生える



ウラジロタデ(タデ科)
Reynoutria sachalinesis

■漢字 裏白蓼 ■別名 ウラジロイタドリ
ケイワタデ

■分布

日本では、北海道、本州(八甲田山、岩木山、谷川岳、利根川源流部、日光、北アルプス中北部)、南千島の高山帯の砂礫地や崩壊地に生える

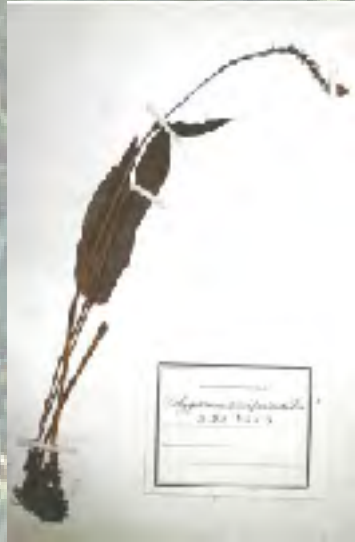


イブキトラノオ(タデ科)
Bistorta major var. *japonica*

■漢字 伊吹虎の尾 ■別名 エゾイブキトラノオ

■分布

日本では、北海道、本州、四国、九州の低山帯～亜高山帯の草地に生える



ムカゴトラノオ(タデ科)
Bistorta vivipara

■漢字 零余子虎の尾 ■別名 コモチトラノオ

■分布

日本では、北海道、本州(中部地方以北)の亜高山帯～高山帯の草地や林縁に生える



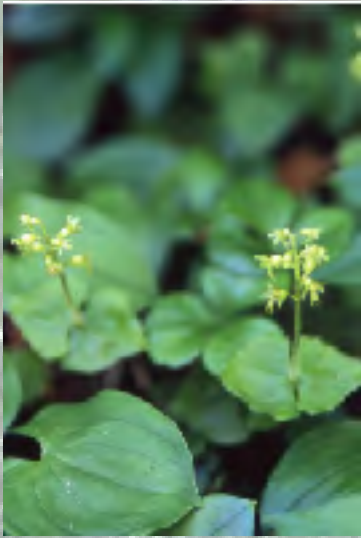
テガタチドリ(ラン科)
Gymnadenia conopsea

■漢字 手形千鳥 ■別名 チドリソウ

■分布

日本では、北海道、本州(中部地方以北)の亜高山帯～高山帯の草地に生える

☐ よみがえる高嶺の草花



コフタバラン(ラン科)
Listra cordata var. *japonica*

■漢字 小二葉蘭 ■別名 フタバラン

■分布

日本では、北海道、本州(中部地方以北)、四国の亜高山帯の林床に生える



ヒメイワショウブ(ユリ科)
Tofieldia okuboi

■漢字 姫岩菖蒲

■分布

日本にのみ生え(日本固有種)、北海道、本州(中部地方以北)の亜高山帯～高山帯の礫地や岩地に生える



チシマアマナ(ユリ科)
Lloydia serotina

■漢字 千島甘菜

■分布

日本では、北海道、本州(早池峰山、八幡平、谷川岳至仏山、中部地方)の高山帯の乾いた草地に生える

引用文献

- ※1 志村寛 (1957) 日本山岳会創立前後之見聞. 『山岳』第50年号.
- ※2 志村烏嶺 (1907) 白馬岳第一回登山記. 『やま』(前田曙山共著)
- ※3 信濃毎日新聞社 (1995) 高山植物の宝庫 信濃の山々. 『信濃毎日新聞』1月15日付記事
- ※4 志村烏嶺 (1958) 近代登山草わけのころ. 『山と博物館』第3巻第5号.
- ※5 山と溪谷社 (2005) 『日本登山史年表』
- ※6 長沢武 (2001) 河野齡蔵と信州理科教育. 『新・北アルプス博物誌』.
- ※7 東京新聞社 (1954) 六十年来の収集あげて学会へ. 『東京新聞』12月25日付記事
- ※8 丸山利雄 (1997) 明治時代の主な日本人研究者. 『長野県植物誌』(清水建美監).
- ※9 志村寛 (1905) ヒメウメバチサウ *Parnassia alpicor* Makino に就きて. 『信濃博物学雑誌』.
- ※10 志村烏嶺 (1912) 二三の高山植物に就きて. 『信濃博物学雑誌』.
- ※11 伊藤隼 (1958) 志村烏嶺翁(下). 『日本山岳会会報』198・199.
- ※12 志村烏嶺ほか口述 (1957) 山岳写真創生記. 『岳人』108号
- ※13 志村寛 (1955) 「高山植物とともに六十年」、『中学時代』4月号.
- ※14 Makino.T (1904) Observations on the Flora of Japan, 『Botanical Magazine Tokyo』18
- ※15 Makino.T (1906) Observations on the Flora of Japan, 『Botanical Magazine Tokyo』20
- ※16 中山琰一 (1989) 『山岳宗徒烏嶺小伝』
- ※17 岩科小一郎 (1980) 志村烏嶺翁のこと. 『やま』復刻版
- ※18 杉本誠 (1999) 日本の山岳写真と写真家たち. 『山を愛する写真家たち』に多くを負って記述
- ※19 峯村隆「長野時代の志村烏嶺」、『新・北アルプス博物誌』
- ※20 中山琰一 (1993) 栃木時代の志村烏嶺. 『歴史と文化』(栃木県歴史文化研究会編).
- ※21 志村烏嶺 (1913) 『千山萬岳』
- ※22 志村烏嶺 (1957) 白馬五十年. 『岳人』110号

謝 辞

企画展開催にあたり下記の個人・団体の皆様ならびに関係機関から、貴重な資料の提供や調査などに対して、多大なご協力・ご後援を賜りました。ここにご芳名を記して心より深く感謝の意を表すとともに厚くお礼申しあげます。

(個人)

秋山 忍 門田 裕一 高橋 秀男 中村 武久 宮本 太

(五十音順、敬称略)

(団体)

独立行政法人 国立科学博物館 植物研究部

(五十音順、敬称略)

よみがえる 高嶺の草花
— 志村烏嶺 旧蔵植物標本 —
近代日本登山の先駆者が遺した山の宝物

執 筆 岑村 隆 / みねむら・たかし
・第一章・第三章・第四章
千葉 悟志 / ちば・さとし
・第二章

発行日 2007年7月7日 発行
発行・編集 市立大町山岳博物館
〒398-0002 長野県大町市大町8056-1
TEL / 0261-22-0211 FAX / 0261-21-2133
E-mail : sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL : <http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/>



大町山岳博物館

